

# 倫理の感度を測る指標づくり

## —保育実践支援システムの構築を目指して—

谷 川 友 美

Research on Ethics Education of Students Who Learn Child Care:  
From the Investigation of Moral Reasoning and Moralistic Developmental Stage

Tomomi TANIGAWA

### 【要 旨】

本研究の目的は、倫理的な保育実践を行う上で必要と考えられている保育士の倫理性の感度を測る指標を開発することであり、今回の質問紙調査の妥当性を検討した。保育士を目指す学生に対し、倫理の感度を測る質問紙調査を行った。調査結果は、記述的分析・因子分析を行った。第1因子「根柢をもってこどものための判断を保育士が行う」、第2因子「判断に迷った時は周囲の人やこどもの判断を拠り所とする」、第3因子「こどもとの関係性を重視・そのこどものためになることをする」、第4因子「こどもの意思を尊重する」、第5因子「判断基準を持つ」、第6因子「子どもの自己決定への躊躇」といった6因子が抽出された。6因子のいずれにも寄与していない項目は、2つ存在した（因子負荷量<.45）。また、第2因子と第3因子の両方に寄与項目も2つ存在した。各因子を構成する項目の内容には差があるので、今回使用した質問紙は、LutzenによるMoral Sensitivity Testの構造と照らし合わせながらの検討を要すると思われた。

### 【キーワード】

保育学生 倫理感のツール開発

## 1. 諸言

倫理は、専門職としての実践の基盤を成すものであり、その検討は専門職としての社会的な位置づけの確立を果たすうえで重要な課題であると広く認識されている<sup>1)2)</sup>。近年、日本における保育士における専門意識の向上に伴い、保育における倫理への関心が高まっている。しか

し、保育における倫理に関する議論の多くが、欧米の価値観に根差した倫理原則を適応して、行為の善悪を判断する、あるいは倫理的ジレンマを解説するにとどまっている。また日本の保育の現場における保育士の倫理的実践とは何かを明らかにし、その向上に直接的に貢献するような研究は見あたらない。

このように、倫理に関する議論の内容が抽象的であったり、「自分にとってしっくりこない

価値観」に基づいた判断を求められたりすることにより、現場の保育士の多くが、倫理とは自分たちの日々の実践とは無関係な議論と感じている<sup>3)</sup>。

専門職としての質の高い保育を実践するには、倫理的決断を行う能力が不可欠である。倫理教育の目標には保育実践において倫理的決断をする能力を持ち道徳的責任のとれる保育士を育てることである。この目標を達成するには、保育士（学生も含む）は個人としての価値観や信念を、倫理的概念の知識や倫理への伝統的・現代的接近法および倫理的行動の記述と統合することを学ばなければならない。倫理的決断をするための保育士の枠組みとして、「個人的信念と価値観」「保育実践のための倫理の概念(構成要素)」「倫理への接近法」「倫理的行動の基準」があるとし、本研究では倫理の概念を明らかにする試みとする。保育士らは日々の実践の中でよい保育を提供しようと努力している。しかし実際は多くの保育士が思うような保育が実現できていない（できないであろう）と感じ、どのようにすれば多様で複雑な保育現場の中でよい保育を具体的に実現できるのか悩んでいることが多い。よい保育を実現できないことを自分の能力不足あるいは資質の欠如と感じて、無力感を感じ消耗していたり、よい保育を行いたいと思っている保育士であっても、多忙な保育現場の中で業務がルーチン化し、保育士としての倫理的責務の自覚が減弱したり、倫理的感受性が次第に鈍麻していく傾向があるのではないだろうか。

本研究の目的は、1) 実際の保育現場で実現されている「よい保育」、つまり倫理的な保育実践とは何かを明らかにし、2) その実現を支援するためのシステムを構築することである。この研究目的を達成するために、以下の3つの課題を設けた。

課題Ⅰ：倫理的な保育実践を行う上で必要と考えられている保育士の倫理性の感度を測る指標を開発する

課題Ⅱ：倫理的な場面における保育士の倫理的判断の動機とその実施に関与する要因を明らか

にする

課題Ⅲ：保育士（保育を学ぶ学生）から倫理的な保育実践についての具体的な記述を収集すると同時にそのような実践の実現を支援するためのシステム構築を検討する

本研究は第一段階として課題Ⅰを明らかにすることを試みとする。

## 2. 研究の背景

倫理は、専門職としての実践の基盤をなすものであり、その検討は専門職としての社会的位置づけの確立を果たすうえで重要な課題であると広く認識されている<sup>1)2)</sup>。近年、日本の保育の倫理への関心は高まっているといえる。しかし、保育における倫理教育では、全国保育士会倫理綱領等を読み、欧米の価値観に根差した倫理原則を適応して行為の善悪を判断する、あるいは倫理的ジレンマを解説するにとどまり、日本の保育現場における倫理実践（よい保育）とは何かを明らかにし、その向上に直接貢献するような研究はほとんど見当たらない。

このように倫理に関する議論の内容が抽象的であったり、自分にとってしっくりこない価値観にも続いた判断を求められたりすることにより、保育現場の保育士の多くが倫理とは自分たちの日々の仕事（実践）とは無関係な議論であると感じている<sup>3)</sup>。

様々な専門職者に関する倫理研究において、各専門職者が日常で直面する問題を倫理的な問題として捉えることが少ないという事は、日本だけに限らずアメリカやヨーロッパ、アジア諸国でも見られる傾向である<sup>4)5)</sup>。さらに、日常で直面する問題を専門職者ら個人の知識不足および技術等能力の問題、組織運営上の問題、あるいは個々の人間関係の問題として捉えられ、十分な検討がされていないのが現状である<sup>6)</sup>。

実際の現場の保育士らもしくは保育士を目指す学生と話す中で感じることに、保育士に専門職としての判断の基に行った結果について、個人の責任が追及されるケースも増加してきているように思われる。そして、自分の能力の限界

と感じ無力感を抱いたり、真剣に取り組み努力した結果バーンアウトしてしまうことも起きている。保育士が問題に直面した際、倫理的問題であるとその問題の存在を感知する感覚は非常に重要といえる。一般的に倫理的な問題を感知する感覚や能力に関しては、ヒューマンサイエンスに関する様々な分野で検討がなされている。保育の中ではまだ、倫理性を感度やその能力を指し示す具体的な指針は未だに確立されていない。本研究では、倫理性の感度を測る指標について、質問紙を用いて明らかにすることを試みており、その結果は保育士らの保育実践を構成する要素を明確化する上で非常に有意義なものと考えられる。

### 3. 方法

#### (1) 対象者

A 県にある保育士養成機関である B 大学短期大学部における保育を学ぶ学生 200 名

#### (2) 質問紙調査

Lutzen により開発された Moral Sensitivity Test を、原著者 (Lutzen) が改変し研究してきた質問紙調査がある。そもそもこれはノルウェーで開発した尺度で<sup>7)</sup>35項目 (6 カテゴリー) 7段階の Likert Scale (1 - 全くそう思う : 7 - 全くそう思わない) からなり、得点が低い程モラルの感受性が高いことを示すとされている。その後、Severinsson<sup>8)</sup>が一般成人を対象とする質問紙に一部改変 (27項目) した英訳尺度を、研究者らは Lutzen と Severinsson の許可を得て日本語に翻訳した質問紙調査を使用した経緯がある。

すでに、中村ら<sup>9)10)</sup>が Lutzen によるモラルの感性測定尺度を日本語訳し用いた先行研究は存在した。しかしながら、今回は一般成人を対象とする保育士養成機関に通う学生を対象とすることと、中村らによる日本語訳の質問内容が、著者が最初に意図したモラルの感性の 6 つの構成概念の内容を忠実に反映していないと判断したため、改めて 27 項目の Severinsson 版を本研究では翻訳し用いることとした。筆者は、

質問紙調査を、保育士を目指す学生版としての改訂を試み、作成・使用した。(モラルの感性測定尺度 : 資料 A)。無記名回答として、回答後は研究者へ直接返信してもらうこととした。

データは統計処理パッケージ SPSS (ver. 11.1) と R を用いて記述的分析、因子分析を行うこととした。質問紙の実施期間は 2013 年 7 月 5 ~ 2013 年 7 月 12 日であった。

#### (3) 倫理的配慮

質問紙は無記名とし個人が特定できないよう配慮した。研究協力者には研究の目的や個人情報情報の守秘に関しての説明を行い、書面にてインフォームドコンセントを得た。データは鍵のかかる保管庫に保管された。

### 4. 研究結果

#### (1) 対象者

A 県にある保育士養成機関に通う保育士を目指す学生 177 名に質問紙を配布し研究協力を依頼したところ、回答があったのは 68 名、回収率 38% であった。

回答者の 68 名のうち、女性 66 名 (97%)、男性 4 名 (6%) であった。回答者の年齢は 18 歳 ~ 48 歳で、平均年齢は 19.92 歳 (SD ± 9.98) であった。

#### (2) の感性測定尺度

資料 A 参照)

#### (3) 質問紙調査

質問紙調査 (モラルの感性測定尺度) の各項目の平均値 (range 1 ~ 7)、項目の合計得点の平均値 (range 7 ~ 189) を表 1 に示す。回答が得られた 68 名中 18 名に欠損値が見られたため、分析から除外した (n = 40 名)。モラルの感性測定尺度の全質問項目の信頼係数 ( $\alpha$  係数) は 0.76 であった。モラルの感性測定尺度の構成概念の妥当性を検討するために、主成分分析を行い、固有値 (eigenvalue) が 1.0 より大きいことを基準に成分抽出を行った (図 1、表 2)。

表1 モラルの感性測定尺度の各項目・合計点の最小値、最大値、平均値、標準偏差

モラルの感性測定尺度の設問番号	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
1	47	1	5	2.02	1.093
2	47	1	7	3.45	1.874
3	47	1	6	2.34	1.356
4	47	1	6	2.94	1.524
5	47	1	7	3.55	1.717
6	47	1	6	2.21	1.350
7	46	1	6	2.09	1.443
8	47	1	6	2.70	1.350
9	47	1	7	3.21	1.531
10	47	1	6	2.85	1.383
11	47	1	6	2.94	1.495
12	47	1	6	2.32	1.218
13	41	2	7	4.10	1.319
14	41	1	6	3.44	1.501
15	41	1	7	3.73	1.703
16	41	1	7	2.78	1.509
17	41	1	6	2.73	1.361
18	41	1	4	2.05	0.947
19	41	1	7	4.00	1.500
20	41	1	6	3.27	1.119
21	41	1	5	2.05	1.139
22	41	1	6	3.44	1.790
23	41	2	7	4.05	1.284
24	41	1	6	2.27	1.415
25	41	2	7	4.46	1.380
26	41	1	5	2.59	1.140
27	41	1	7	3.41	1.760
TTL	47	27	106	74.77	18.859

因子抽出法：主成分分析

※スクリープロットの線形と累積因子寄与率に基づき、6成分の抽出を行った。6成分による累積因子寄与率は56.7%、バリマックス回転後の各項目の因子負荷量を表3に示す。回転後の因子負荷量の絶対値が0.45以上を示した項目の内容を参考に、各因子の特性を解釈した。

因子抽出法：主成分分析 回転法：Kaiserの規化を伴わないバリマックス法

第1因子「根拠をもってこどものための判断を保育士が行う」(14, 15, 20, 21, 25)

第2因子「判断に迷った時は周囲の人やこどもの判断を拠り所とする」(10, 16, 17, 24)

第3因子「こどもとの関係性を重視・そのこどものためになることをする」(2, 12, 17, 26, 27)

第4因子「こどもの意思を尊重する」

(5, 7, 8, 18, 23)

第5因子「判断基準を持つ」(4, 9, 11, 19, 22)

第6因子「子どもの自己決定への躊躇」(3, 13)

図1 固有値を示すスクリープロット

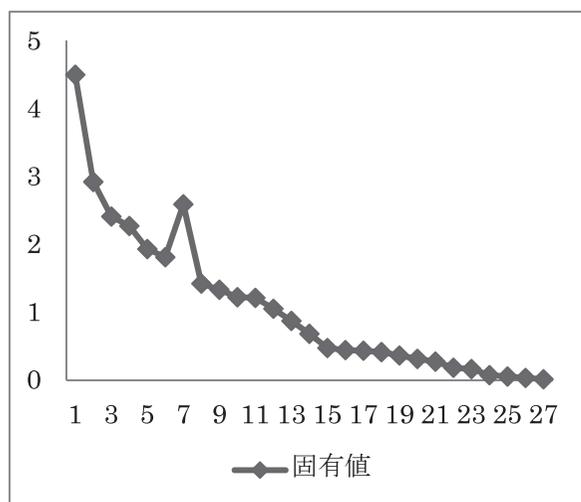


表2 主成分分析の結果の固有値及び分散、累積分散

成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和		
	合計	分散の%	累積%	合計	分散の%	累積%
1	4.479	16.588	16.588	4.479	16.588	16.588
2	2.847	10.544	27.132	2.847	10.544	27.132
3	2.235	8.277	35.409	2.235	8.277	35.409
4	2.064	7.643	43.052	2.064	7.643	43.052
5	1.894	7.016	50.068	1.894	7.016	50.068
6	1.802	6.674	56.742	1.802	6.674	56.742
7	1.503	5.567	62.310	1.503	5.567	62.310
8	1.296	4.800	67.110	1.296	4.800	67.110
9	1.179	4.368	71.478	1.179	4.368	71.478
10	1.034	3.838	75.305	1.034	3.828	75.305

6因子のいずれにも寄与していない（因子負荷量<.45）項目が2つ存在した（項目1, 6）。また項目16は第2因子と第3因子の両方に寄与している。

LutzenによるMoral Sensitivity Testは、グラントセオリーを用いた質的分析の結果抽出された6因子（1. Interpersonal orientation 2. Structuring moral meaning 3. Expressing benevolence 4. Modifying autonomy 5. Experiencing conflict, and 6. Reliance on knowledge/rules）を構成因子として開発され、妥当性が検討された尺度である。同じく6因子が抽

出されたが、各因子を構成する項目の内容には差があるので、今後LutzenによるMoral Sensitivity Testの構造と照らし合わせながらの検討が必要と考えられる。

## 5. 考察及び今後の課題

保育を学ぶ学生の倫理の感度を測るツールとしてLutzenによるMoral Sensitivity Testを日本語訳し、何度かの改良を重ねたツールを今回試用した。その結果から、Lutzenのオリジナル版：Moral Sensitivity Testの構成概念と

表3 バリマックス回転後の因子負荷量

モラルの感性測定尺度の設問番号	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5	因子 6
1	. 347	-. 104	. 160	. 239	. 092	. 340
2	. 297	. 134	<u>. 646</u>	. 192	. 177	-. 064
3	-. 121	. 082	. 062	. 052	. 203	<u>. 634</u>
4	. 034	-. 199	-. 070	-. 088	<u>. 709</u>	. 145
5	-. 128	. 081	. 087	<u>. 562</u>	-. 062	. 350
6	. 427	-. 423	-. 250	. 406	. 035	-. 161
7	. 017	. 141	. 093	<u>. 729</u>	-. 181	-. 400
8	. 212	. 301	-. 073	<u>-. 429</u>	-. 239	-. 107
9	. 019	. 204	. 153	. 152	<u>. 475</u>	-. 081
10	. 220	<u>. 554</u>	. 103	-. 420	. 080	. 183
11	. 008	. 340	. 265	. 132	. 535	3. 002E-05
12	-. 134	-. 158	<u>. 724</u>	-. 228	. 155	-. 122
13	. 086	. 033	-. 016	-. 022	-. 258	<u>. 788</u>
14	<u>. 580</u>	. 001	. 178	-. 093	. 190	. 342
15	<u>. 502</u>	. 410	-. 011	-. 247	. 150	. 253
16	. 012	<u>. 788</u>	-. 018	. 078	. 009	. 046
17	-. 041	<u>. 608</u>	<u>. 557</u>	. 116	. 199	-. 075
18	. 088	. 057	-1. 33	<u>. 696</u>	. 135	. 067
19	. 372	. 288	-. 226	-. 208	<u>. 525</u>	. 128
20	<u>. 769</u>	-. 017	. 077	. 040	. 188	-. 082
21	<u>. 586</u>	. 000	. 183	. 162	-. 129	-. 275
22	. 369	. 274	. 237	-. 054	<u>. 499</u>	-. 280
23	. 356	-. 007	. 209	<u>. 452</u>	-. 413	. 049
24	. 077	<u>. 808</u>	-. 072	. 106	. 157	-. 048
25	<u>. 596</u>	. 300	. 115	-. 159	-. 159	. 017
26	. 165	. 060	<u>. 688</u>	-. 016	-. 034	. 120
27	. 339	-. 018	<u>. 696</u>	. 087	-. 188	. 324

類似した6因子が抽出された。しかし、いずれの因子にも属さない項目、あるいは重複して属する項目がある等ということから、日本の保育において倫理の感度を測るツールとして項目自体の信頼性と妥当性の再検討が必要であると考えられる。Lutzen自身もMoral Sensitivity Testを開発した時点から現在までの現場環境の変化や精神科特有の考え方を一般的な考え方に変換して用いることを考慮して、どう質問紙の構成概念の妥当性に再検討を要することを指摘している (Personal contact May23, 2005)。

また、質問紙を答えながら学生らは、「設問に違和感を感じた」、また「理解が難しい文書はなかった」と述べた。さらに、選択肢が1(全くそう思う)から7(全くそう思わない)と幅が広いので、回答の選択を難しく感じたと述べる学生もいた。加えて、想定する具体的な場面によって、選択が変わることもあるので、一貫性がない回答になってしまったと話す学生もいた。また、設問の文章を読んでそれを自分に問いかけることにより、保育の倫理感というのが表面化してくるのだと感じたと述べた学生がお

り、倫理の感性を測る指標として設定した今回の質問項目が、対象者自身の倫理に関する感性を適切にとらえられているかどうかは判断が難しいという感想であったように思われる。

さらに、学生としての倫理的感受性が高い人というのは、「保育について深く考えている人や一生懸命学ぼうと努める人」であり、その人の「人間性」「今までの経験」「保育に対する思いや気持ち」が倫理的な感受性に反映されると考える学生もいた。学生が保育の仕事をしていて感動する場面とか、そういう場面に遭遇しそのことに対し感じないし感じた経験がある人というのは、倫理的に良い感性が、高まってくるとのかもしれない。

今後は、学生のインタビューや半構成面接等のデータおよび最近の教育・実践に関する先行研究等を合わせて、保育士の倫理の感性を構成するものを抽出し、倫理の感性を的確に捉える事の出来るツールの作成を検討していく必要がある。

## 6. おわりに

「倫理」とは、善悪や正誤判断を含む人間としてのよい生き方だとされている。また、倫理学は「すべてを考慮したうえで、ある一定の状況において何を成すべきかという問題に対して体系的に応えようとする試みである。しかもその答えを正当化しようとするところみである」とされている<sup>11)</sup>。このことから、保育における倫理、即ち保育倫理とは、「保育士としての善い在り方」、さらには、全てを考慮したうえで、その状況において保育士として何をすべきかについて考える事だといえるだろう。

倫理的判断を要する場面に出会ったとき、保育士としてどのような倫理的意思決定を行い、それを実践することができるだろうか。結局のところ、保育の倫理は個々人の保育士が持つ保育観が反映されているといえよう。こどもを安全に預かり危険を回避することで命を守ることを大切だと考える保育士は、安全管理や衛生管理に力を入れるだろうし、こどもの人間として

の権利や自己表現が大切だと考える保育士は、こどもの意見をしっかりと聞くことに時間を割くだろう。これらの判断は、いずれも正解とも間違っているともいえない。どれも、保育士の価値観が反映されたその保育士が考えるよい保育、つまり倫理的な保育だからである。保育士として倫理的な実践を行うためには、自分が考える「よい保育」とはどのようなものなのか、それぞれの場面で自分が最も大切にしている「保育士としてすべきこと」は何なのかを常に問いかけ、それに基づいて行動する努力を続けることが大切だといえる。

保育士は現場の中で様々な場面で、相反する価値の間で調整を行いその状況の中で最善と思われる対応を見出して実行していかなければならない。

保育場面における倫理的問題には一人のこどもに対する倫理的な責務だけでなく、他のこどもをも含んだ保育ケアの受け手全体に対する責務や、他スタッフとの関係性、組織の一員としての義務や責任も関係している。また、決定された保育計画に従うという他スタッフとの関係性に関連する問題が含まれている。これらの問題を考慮したうえで、この状況で保育士としてすべきことは何かと自分なりに判断し実行していかなければならない。というものの、独りよがり根拠もなく判断するようではいけない。自分の判断や行動の倫理性を説明できなければならないのである。「なぜ、そのようなことしたのか」と問われたとき、倫理綱領等を根拠として提示しながら、相手が納得するように説明できるようになることが、今後の保育士に求められることである。そして、それが保育の質の向上につながることは間違いないといえよう。

本研究では、倫理的な保育実践を行う上で必要と考えられている保育士の倫理性の感度を測る指標を開発したいのではあるが質問紙を学生へ提示した。揭示し調査を行う過程で学生が倫理を考える機会となる。よって、率直に述べた学生の意見も参考にしながらツール開発を進めると共に、学生が思わず溢した言葉も意味深い内容と感じられれば拾い上げ、意味づけ作業を

一緒に行くべきであろう。なぜなら教育者の関心は、学習者が自分の経験や発された言葉をいに意味づけ、その意味づける過程を促進するかということに向けられるべきだからである。

### Summary

Childcare requires an ethical viewpoint. It being important when performing ethical practice is having ethical sensitivity. And this research wants to develop the tool which can measure ethical sensitivity. The tool used what has been used until now. The purpose of research wants to clarify whether the used tool can measure the sensitivity of a childcare worker's ethicality. It investigated to the student who wants to become a childcare worker. Question paper investigation which measures ethical sensitivity was conducted. Results of an investigation conducted descriptive analysis and factor analysis.

They are the 1st factor "a childcare worker makes a judgment for a child with a basis", and the 2nd factor "when it wavers in judgment, a judgment of the surrounding person and a child is made a ground" six factors called the 5th factor "it has a criterion of judgment" and the 6th factor "hesitation to a child's self-determination" were extracted. [ factor / 4th / third factor "it carries out that it is beneficial to serious consideration and its child in relationship with child" and / "a child's intention is respected" ]

Two items which are not applied to which of six factors were extracted. Moreover, two items applicable to both the 2nd factor and the third factor were also extracted.

A difference is by the contents of the item which constitutes a factor, respectively.

Therefore, I considered the question paper used this time as it is better to inquire as compared with the structure of Moral Sensi-

tivity Test by Lutzen.

### Keyword

The student who aims at a childcare worker  
Ethics Tool development

### IV. 引用文献

- 1) Bishop A, Scudder J. Nursing Ethics : Therapeutic caring presence. Boston : Jones and Bartlett Publishers ; 1996
- 2) Pellegrino ED. Toward a virtue-based normative ethics for the health professions . Kennedy Institute of Ethics Journal . Sep1995 ; 5 ( 3 ) : 253 - 277.
- 3) Izumi S . Nursing Ethics in End-of-Life Care in Japan [PhD dissertation]. Portland , OR : School of Nursing PhD program, Oregon Health & Sciences University ; 2003.
- 4) Doutrich D,Wros P,Izumi S. Relief of suffering and regard for personhood:Nurses' concerns in Japan and the USA. Nursing Ethics :An International Journal for Health Care professionals. 2001 ; 8 ( 5 ) : 448 - 458
- 5) Taylor CR. Everyday nursing concerns:Unique? Trivial?Or essential to healthcare ethics? Hastings Center Report. 1997 ; ( 9 ( 1 ) ) : 68 - 84
- 6) 野島佐由美, 倫理的感受性と倫理的意思決定, 看護, 2003, 55 ( 4 ) : 63 - 70
- 7) Lutzen K, Nordin C, Brolin G. Conceptualization and instrumentation of nurses' moral sensitivity in psychiatric practice. International Journal of Methods in Psychiatric Research. 1994 ; 4 : 241 - 248
- 8) Severinsson EI, Kamaker D. Clinical nursing supervision in the workplace—effects on moral stress and job satisfaction. Journal of Nursing Management. Mar1999 ; 7 ( 2 ) : 81 - 90.
- 9) 窪田・中村・石川・伊達・伊勢崎・奥村, 臨床看護師の葛藤場面に対する認識の特徴, 山梨医科大学紀要, 1999, 16, 65 - 70.
- 10) 中村・石川・比延島他, Moral Sensitivity Test (日本語版) の信頼性・妥当性の検証 Part I. 山梨医科大学紀要, 2000, 17, 52 - 57
- 11) ベンジャミン. M, カーティス. J, 矢次正利, 宮越一穂, 他訳: 臨床看護のディレンマ I ; 生命倫理と医療経済・医療制度, 時空出版, 1995, p12

資料 A  
【 道徳性の感性測定尺度 保育士学生版 】

次の文章をよんで、「全くあてはまる」から「全くあてはまらない」を7として該当番号に○をつけなさい

1. こどもの状況を知っていることは、保育士としての私の責任である  
全くあてはまる 1 2 3 4 5 6 7 全くあてはまらない
2. もしこどもがよくなっていかないと、私の仕事（保育士）は意味がないと思う  
全くあてはまる 1 2 3 4 5 6 7 全くあてはまらない
3. 私がした保育はどんなことでも、こどもから良い反応を得ることが重要である  
全くあてはまる 1 2 3 4 5 6 7 全くあてはまらない
4. 私の意思に反した決定をしなければならない時、私は何がよい保育であるかという私の考えにもとづいて行う  
全くあてはまる 1 2 3 4 5 6 7 全くあてはまらない
5. もしこどもの信頼を失ったならば、私の仕事（保育）は意味がないと感じるだろう  
全くあてはまる 1 2 3 4 5 6 7 全くあてはまらない
6. こどものために難しい決定をしなければならない時は、子供に正直であることが大切だと思う  
全くあてはまる 1 2 3 4 5 6 7 全くあてはまらない
7. よい保育には、子供自身の選択を尊重することが含まれる  
全くあてはまる 1 2 3 4 5 6 7 全くあてはまらない
8. どのようにこどもに近づいたらよいのか悩むことがよくある  
全くあてはまる 1 2 3 4 5 6 7 全くあてはまらない
9. ある種のこどもの保育には、こうすることが良いことだという決まり（倫理規定）が必要だと考える  
全くあてはまる 1 2 3 4 5 6 7 全くあてはまらない
10. こどもに対してどう行動することが、倫理的に正しいのか難しい状況によく出会う  
全くあてはまる 1 2 3 4 5 6 7 全くあてはまらない
11. ある子どもについてよく知らない場合、私は職場のルールに従う  
全くあてはまる 1 2 3 4 5 6 7 全くあてはまらない

12. 保育で最も重要なことは子どもと私の関係性である  
全くあてはまる 1 2 3 4 5 6 7 全くあてはまらない
13. 子どもに自分のことを決めてもらうのが難しい場面をよく出くわす  
全くあてはまる 1 2 3 4 5 6 7 全くあてはまらない
14. もし子どもが拒否しても、それが最も良い保育方針だという保育知識をもとに行動する  
全くあてはまる 1 2 3 4 5 6 7 全くあてはまらない
15. こどもに代わって保育士が決めることがよい保育だといえることが良くあると思う  
全くあてはまる 1 2 3 4 5 6 7 全くあてはまらない
16. こどもについて不確かなことがあるときは、ほとんどの場合、そのこどもについて他の保育士が知っていることを頼りにする  
全くあてはまる 1 2 3 4 5 6 7 全くあてはまらない
17. 私が正しいことをしたかどうかを教えてくれるのは、子供の反応であることが多い  
全くあてはまる 1 2 3 4 5 6 7 全くあてはまらない
18. 私は自分の行動に影響している、自分の価値観などについてよく考えることがある  
全くあてはまる 1 2 3 4 5 6 7 全くあてはまらない
19. 何が良いのか悪いのか判断するのが難しい状況では、理論よりも自分の経験の方が役に立つ  
全くあてはまる 1 2 3 4 5 6 7 全くあてはまらない
20. こどもが保育を拒否するときは、従うべきルールをあることが大切と思う  
全くあてはまる 1 2 3 4 5 6 7 全くあてはまらない
21. 子どもが参加する保育が良い保育だと思う  
全くあてはまる 1 2 3 4 5 6 7 全くあてはまらない
22. 子ども抜きで決めなければならない苦しい状況によく出会う  
全くあてはまる 1 2 3 4 5 6 7 全くあてはまらない
23. 子どもの意思に反して良い保育を行うのは難しいと感じる  
全くあてはまる 1 2 3 4 5 6 7 全くあてはまらない
24. 何が正しいのかわからない状況では、私はどうすべきか同僚や友人や先生など他者に相談する  
全くあてはまる 1 2 3 4 5 6 7 全くあてはまらない

25. 子どものために難しい決定をしなければならない時、私は自分が感じたことに従って行動する

全くあてはまる 1 2 3 4 5 6 7 全くあてはまらない

26. 保育士は個々の子どもに対して、どのような義務があるのかを、保育士として常に知っておかなければならないと思う

全くあてはまる 1 2 3 4 5 6 7 全くあてはまらない

27. 子どもが自分の状況について理解を得られるような援助ができなくても、私は保育士としての自分の役割に意味を見いだせる

全くあてはまる 1 2 3 4 5 6 7 全くあてはまらない